



毎年恒例となりました「さつぼろフェス」が10月14日(日)、札幌市男女共同参画センターで行われました。この催しは高教組札幌支部や子どもと教育・文化道民の会など8つの民主団体が実行委員会を構成し、札幌市や札幌市教育委員会に後援をいただきながら、シンポジウムや分科会などで、学習交流を深める場です。今年も「笑顔が輝く子どもと大人の未来」かわりのわずらわしさを乗り

# なほ子どもで、教育・市民・モデルの18に参加して



越えて」と題し、子どもをまんなかに、どう大人がつかざるかを大いに語り合いました。オーブニングは札幌市立大通高校の和太鼓・伝統芸能部のみなさんによる迫力ある太鼓パフォーマンスからスタートしました。会場いっぱい響き渡るみなさんの聞いて欲しかった。シンポジウムはコーディネーターに北海道大学の宮崎隆志先生をお招きし、スクールソシ



# 高教組札幌支部 秋のブロック会議・交流会

「カオカオ」や「ねっこほっこ」といった子ども食堂や「む

11月17日の土曜日にBブロック会議・交流会が5分会9名の参加で行われました。どの職場も多忙でそれぞれ分活活動が思うようにできていない現状が語られました。「生徒に寄り添うことで先生方もやりづらくなってしまっている方がいる。」以前はもっとアットホームな職場だったのに今はギスギスして閉塞感が漂っている。「人手が足りずに毎日へと

くどり」など子どもの居場所づくりの奔走されている方々がいることに新鮮な驚きを覚えつつ、殺伐とした現代ながら、「世の中捨てたもんじゃないな」と大変感心した時間を過ごせました。参加者は例年をやら下回っており、来年はぜひ大勢のみなさんに参加してほしいものです。なお、この交流会と並行して実施された子どものための「あそびの広場」は100人を超える参加で、大盛況でした。子どもたちのパワーに負けてられません。



上写真はDブロック会議・交流会 右写真はCブロックです。

へと。「先輩の先生が抜けてじり貧」という大変な職場の話から「大人の部活(BBQ、登山や自転車など)を高教組の先生が中心になって行っている。」「先生方の仲が良く職場の雰囲気は良い」などと楽しい話まで様々な話題で盛り上がりました。「つながるカード」の取り組みでは高教組に加入した当時のこと、なんで今も組合に入っているのか、これからの決意などの想いを書き込みました。最後に登場した若い先生が「高教組の仲間、学習、情報で安心していられる。」という話に勇気づけられ交流会を閉めました。手稲養護学校 桑原岳夫



# 2018合同教育研究全道集会 教育の夕べ記念講演

## 何のために学習指導要領を主体的につかむのか?

### 梅原利夫さん 民主教育研究所

いま「アクティブラーニング」「対話的で深い学び」という言葉が学校現場には非常に形骸化されて機械的に降ろされていることを非常に危惧しています。学習指導要領を主体的につかむということは、その可能性や弱点・矛盾、あるいは無理難題にしっかりと目を向けて、その克服の緒、克服の芽をわたしたち自身の力でつかんでいくということです。わたしが指導要領体制について話をするとその構造や縛り強さによって、指導要領体制が非常に大きく見えてしまいます。しかし、一見美しく見事に見える指導要領体制も、実は教育理念の立場からみると、いろいろと無理難題や未成熟な言葉が無責任に散りばめられていることがわかります。その矛盾や弱点というものを私たちが自分の目で、自分の力でつかみ取っていくために主体的につかむということを強調したいのです。いま権力とか国の支配をしている人たちはなんとか教育の中に乱暴に介入して自分たちだけがめざす子どもの姿を権力的につくろうとして、教育現場をその手段・道具にしよつとしていきます。しかし、教育の現場で明らかなのは、教職員・父母、あるいは地域住民の方々が子どもと直接接する場そのものに

は、権力は介入できないということです。制度とか指令とかシステムで縛ろうとしていますが、直接的な人間と人間の教育的働きかけ合いの局面には、乱暴に介入させてはならない、することもできないわけでは、システムがいかにか問題を解決しようとしても、直接子どもに対して責任を持つている私たちの仕事は非常に重要だということを確認したいと思います。いろいろな問題のある学習指導要領でもえも次の一句は消し去ることはできません。それは教育課程といのは子どもの実態や地域の実態に即して各学校が編成して実践するものだということですが、ここに私たちが依拠すべき点があります。私たちが主体的につかんだ上で切り返して実践していく足場をしっかりと私たちは持つために指導要領を主体的につかむことが必要だということでは、人間を育てる営みに冷たい数値目標追求方法はなじまないこと、教育という総合的な営みに点検・支配・服従の人間関係は逆効果であるということたいし声を大にして言っていきたい、いまこそ教育実践に自主性、柔軟性、創造性、そして一番重要なことですが専門職性のうねりを巻き起こす必要があるのではないかと思っています。

新自由主義の世界でトレーニングとなつて久しい競争及び数値化の教育では、教育の機能が「資格化」と「社会化」だけで終わってしまい、それは現状の世界の固定化につながると論じています。「教師の仕事は、ベルトコンベアで運ばれてくる生徒に、知識や技能といった部品を付け加えて右から左に送るような外圧的・操作的・反復的なものではない」と警鐘を鳴らしつつ、私たち教師は教育の「主体化」という側面に対して意識的に取り組む必要があると訴えています。

上記の課題は、個々の教員が現場で工夫を凝らし、または教育研究会などで集团的議論を深めながら模索すべき課題ではありますが、その工夫なり、議論なり、模索をする上で、土台となるべき大切な情報および視座があります。それは、そもそも「子ども」たちが現在の日本社会において、どのような客観的状况に置かれているのかといった問題意識です。それを明確にあげり出すブックレットの第二弾が、このたび「子どもと教育・文化・道民の会」より出版されました。題して「21世紀の子どもの権利を考えるPart2 格差社会日本における『子ども期の貧困化』」国連子どもの権利条約と安倍第2次政権、「子ども権利条約市民・NGO報告書をつくる会事務局長の世取山洋介さんの講演をまとめたものです。一冊300円。購入希望者は、高教組札幌支部までご連絡を。札幌東商業高校 野村健治

### ご紹介

# 子どもと教育文化 格差社会における子ども期の貧困化